

1 1	海部	あま市立甚目寺西小学校	アサイ リカコ
			名前 浅 井 里 佳 子

分科会番号	1 2	分科会名	自治的諸活動と生活指導（小学校）
-------	-----	------	------------------

研究題目 あたたかな関わりを通して互いに認め合う児童の育成
 ー居心地のよい安心できる学校を目指してー

研究要項

1 研究のねらい

本校は「明るく やりぬく たくましい子」の校訓のもと、一人一人の個性を伸ばし、心身ともに健やかで、知・徳・体の調和のとれた人間形成を図っている。また、規則や規律を大切にし、ともに生きようとする児童を育成することを目標に掲げている。

令和3年度より継続して行ってきた、関わりの力育成プロジェクトである「にしっこタイム」は、学校経営案の中でも人権教育の柱として位置づけられ、仲間とのふれあいの場を意図的に設定することで、子どもたちの関わりの力を高め、自他を認め合える児童に育ってほしいという願いが込められている。昨年度から週1回「にしっこタイム」に取り組み、全教員共通理解のもと全校体制で行っている。また、教員ミニ研修を行い「にしっこタイム」を行うことに対しての不安軽減にも配慮している。

全校児童に対して「にしっこタイム」に関するアンケートを行ったところ「友達の話を聞くのは好きですか」という質問に好きと答えた児童は94%であったのに対し「自分の話をするのは好きですか」という質問に好きと答えた児童は83%であった。また「自分のことは好きですか」という質問に対して好きと答えた児童は78%であった。友達の話を聞くのは好きだけれど、自分のことを話すことには抵抗を感じる児童がおり、さらに自分のことを好意的に捉えられない児童がいる傾向があるとうかがえる。そこで「にしっこタイム」だけでなく、異学年交流やペア・グループ活動を充実させることで自己肯定感や自己有用感を高めていくことができるのではないかと考えた。

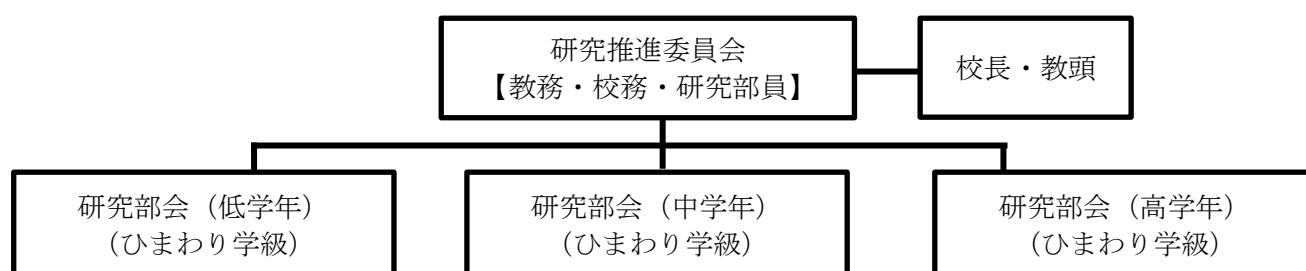
2 めざす生徒像

- ・ 一人一人が自分を大切にし、他者も大切にするのできる児童
- ・ 自分のよさに気づき、それを高めるのできる児童

3 研究の仮説

- (1) ソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを組み合わせた「にしっこタイム」を定期的に行うことで、児童の関わりの力を高めることができるだろう。
- (2) 仲間との関わり合いの場として異学年交流の場を設定することで、主体的に楽しみながら関わり合い、自己有用感を味わうことができるだろう。
- (3) 授業内で日常的にペア・グループ活動を取り入れることで安心して発言できる学級づくりができるだろう。

4 研究の組織



5 研究の方法

- (1) 対象学年 全学年
- (2) 手立て

- ① 関わりの力育成プログラム

毎週火曜日の朝「にしっこタイム」と称したソーシャルスキルトレーニング・構成的グループエンカウンターを融合した活動を設ける。3～4人で構成したグループで、4つのルール「あいさつ」「うなずき」「話している人を見る」「指示を聞く」を意識しながらテーマに沿って話す活動である。互いに関わり合いながら、自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合う態度を身に付ける場を設定する。

- ② 異学年交流活動

「にしっこクリーンキャンペーン」「児童会活動」「ペア学年活動」など、異学年との交流活動を継続し、児童の自己有用感を高める。

- ③ 授業内でのペア・グループ活動

各教科においても「にしっこタイム」で培った関わりの力を新たに「にしっこトーク」と称して、ペア・グループ活動に取り入れ、自分の意見や考えを伝えられる場を設定する。

- (3) 検証

各学級で「にしっこタイム」に関する児童アンケートや教員アンケートを実施して、児童の変容を追い、教員研修を充実させて教員の意識調査も行う。

6 研究の計画

- R8年4月 教員ミニ研修、事後アンケート・入学おめでとう集会
 - R8年5月 Q-Uアンケート、「にしっこタイム」児童・教員アンケート①、クリーンキャンペーン
 - R8年6月 「にしっこタイム」教員チェンジ・異学年交流
 - R8年7月 「にしっこタイム」児童・教員アンケート②
 - R8年8月 「にしっこタイム」教員ミニ研修
 - R8年9月～11月 研究実践の継続
 - R8年11月～12月 「にしっこタイム」教員異学年チェンジ
 - R8年12月 「にしっこタイム」児童・教員アンケート③
 - R9年2月 「にしっこタイム」教員ミニ研修
 - R9年3月 「にしっこタイム」児童・教員アンケート④
- 研究のまとめと今後の課題・次年度への引継ぎ

7 活動の実際

- (1) 関わりの力育成プログラム

- ① 「にしっこタイム」セットの整備

特別支援学級を含めた全クラスに「にしっこタイム」セットを作成した【資料1】。セットの中には、エクササイズ毎の指導案やお題カードなどが入っている。4つのルールや座席表、話型などもラミネートされ、磁石もつけてある状態なので、いつでも誰でも簡単に始めることができるものとなっている。

指導案の中には、全体の流れや時間だけでなく、実際に使うセリフを記載し、初めての教員でも取り組みやすいように工夫されている。慣れてきたら省略できるところや注意点などを分かりやすく、見やすく書くことで活動に取り組むためのハードルを低くした。

- ② 教員同士の関わりの力

4月に教員ミニ研修を行った【資料2】。新しい学年陣でグループをつくり、アイスブレイクやアドジャンを体験させた。事後のアンケートでは、すべての教員が「にしっこタイム」の理解を深めることができたと答えた。また「年度当初にやるのは共通理解するのによい」「定期的にこのような機会があると理解が深まる」「昨年度よりも充実したにしっこタイムができそう」というような声が上がった。研修後の「にしっこタイム」では、研修で学んだ言葉がけを取り入れている姿も見られた。



【資料1 「にしっこタイム」セット】



【資料2 ミニ研修の様子】

研修を行うことで情報がアップデートされ、教員同士の共通認識や理解を深めることができた。「いつでも」「どの教員でも」「当たり前」にできることで継続して行うことができるようになっていく。全校体制で行っているため、活動における不安や成長を共有することもできた。

③ 教員をチェンジした「にしっこタイム」

6月に教員をチェンジして「にしっこタイム」を行った【資料3】。普段は、同じ時間に行っているため、他のクラスの様子を見に行くことが難しい担任も、校内の様子を見て回ったり、自分のクラスの様子を外側から見たりすることができた。

事後アンケートでは、多くの教員が全校実施の一体感を感じ、他のクラスの様子が分かったと答えた。「授業とは違う一面が見られ、授業にも生かしたい」「学年、学級ごとに発達段階や雰囲気が違い、見ていて面白かった」という声が見られた。また「どのクラスでも同じ流れができていて、学校全体での取り組みであると感じた」「教員をチェンジをすることで誰がやっても同じように活動できる流れが子どもたちの中にできていると感じた」など、学校全体での取り組みであることを教員が再確認することができた。

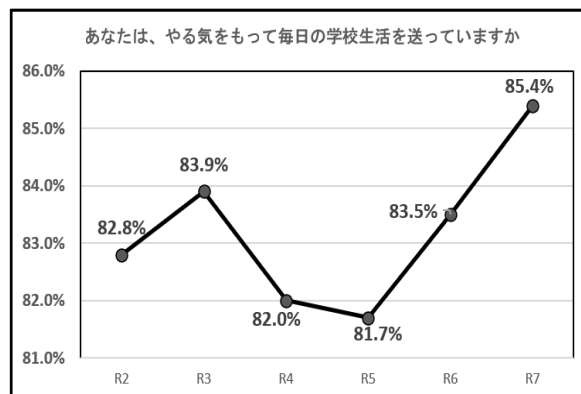
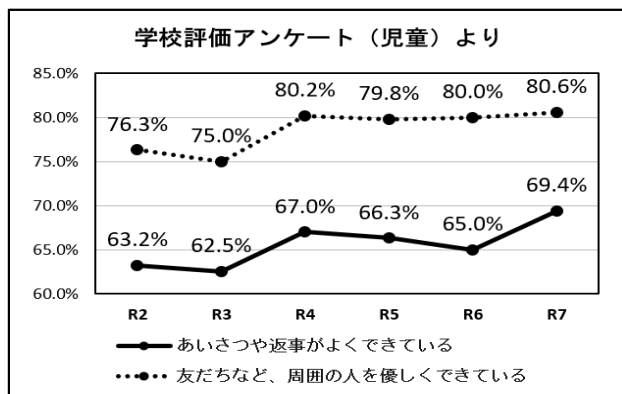


【資料3 にしっこタイムの様子】

また、児童アンケートでは「いつも通りできた」「担任の先生がやるときと変わらない」「いつものように話せました」という声が多く見られた。教員がやり方を揃えて行うことで、子どもたちは混乱することなく、取り組むことができた。「担任じゃない先生が新しいことを褒めてくれてうれしかった」「自分のクラスのことを褒めてくれてうれしかった」という声があった。一方で「少しやり方が違って混乱した」「いつもとルールが違った」など、子どもたちを通じて一部やり方が揃っていなかったことを知ることができた。

④ 児童同士の関わりの力

学校評価アンケートの結果から、少しずつ周囲と心地よい関係を築くことができるようになっていくことが分かった。その結果として「毎日の学校生活に対するやる気」を引き出すことにつながっていると考えられる【資料4】。



【資料4 学校評価アンケート（児童）】

【7月の児童アンケートの抜粋】

- ・ 話している人の方を見ることができるようになった。
- ・ 友達との交流が増えた。
- ・ 友達の知らないところまで知れてうれしい。
- ・ 人との関わりが増えた。
- ・ イベントで知らない子どもがいても話せるようになった。
- ・ いつも仲良くしない子とも、仲良くなれた。
- ・ 友達との距離がちょっとずつ近づいていっているのがうれしい。
- ・ 友達と話すときに、うなずき、話している人を見るのが自然とできるようになった。

アンケートの結果からも、子どもたちは友達同士の関わりの力が強くなっていることが分かった。週に1回固定で実施されることで、定期的に友達と話す機会がつけられ、活動が定着していると考えられる。また、友達との距離も近くなり、仲良くなるきっかけになっている。

(2) 異学年交流

① 1・6年生の交流活動

6年生では国語科の単元「みんなで楽しく過ごすために」で学習した、目的や条件に応じた話し合い活動の発展として「1年生と楽しく交流する会」を計画し実践した。今回の交流会では、1年生とトランプや UNO、なぞなぞなどと一緒に遊ぶことで、学年間の親睦をさらに深めることを目標とした。12 班に分かれた6年生が、1年生を楽しませるために、班ごとに遊びの種類を決め、準備から当日の進行までを担い活動した。交流会当日は、笑顔でゲームに参加する姿や6年生の説明を熱心に聞く1年生の姿を見ることができた。活動後、6年生からは「1年生に優しくていねいに教えることができた」「1年生のみんなが楽しく過ごしていて自分たちも楽しく過ごせた」「たくさん準備したかいがあった」など最高学年としての責任感や達成感につながる振り返りを聞くことができた。1年生からは「いっぱい遊んでくれてありがとう」「また遊びたい」という、この交流会にとっても満足した感想を聞くことができた。実践を通して異学年の児童の感じ方や考え方に接し、互いのよさを認め、思いやりの気持ちを育む温かい交流ができた。



【資料5 1・6年生交流活動】

② 1・2年生の交流活動

2年生が1年生を連れて、校舎の中を案内する活動を行った。2年生は、昨年度知ったことや体験したことを基にそれぞれ説明する場所を決め、1年生に伝わりやすいように話す言葉を考えた。1年生に「静かに歩くよ」「右側を通るよ」「こっちだよ、ついてきてね」などと声を掛けながら、図工室や家庭科室、理科室など2年生自身も使った経験がない特別教室のことも、上級生などから聞いた話を思い出しながら1年生に説明をした。1年生は、初めて見る大きな教室を見て、目を輝かせていた。1年生と2年生を1人ずつペアにすることで、2年生は自分のペアの1年生に学校について伝えようと意欲をもって活動することができた。案内の途中で階段を登るのに疲れてしまったり、トイレに行きたくなったりする1年生もいたが、ペアの2年生がいることで安心して校舎内を歩くことができた【資料6】。



【資料6 学校案内の様子】

③ 3・4年生の交流活動

4年生の図画工作科の「コロコロガーレ」(ビー玉迷路の工作作品)を用いて、3・4年生でペア学年活動を行った。班ごとに3・4年生の児童が自己紹介を行った後、4年生から3年生へ遊び方の説明をし、3年生の児童が4年生の作った作品と一緒に遊ぶ活動を行った。3年生の児童は迷路をゴールしたら、別の4年生の児童とペアになり活動を進めていった。最初は互いに緊張した様子が見られ、教室内も静かだったが、何度かペアを変えていくうちに接し方にも慣れ、自分が思ったことを素直に言い合いながら楽しむ姿が見られた。



【資料7 3・4年生の交流活動】

交流後の振り返りでは「遊んだ後に『楽しかったです』と言ってくれてうれしかった」「(来年の)3年生のために3年生が『楽しい』と思ってもらえるような作品を作ってあげてください」という意見が4年生から上がった。3年生に遊んでもらうという場を設定することで、4年生にとって作品作りに分かりやすい目的ができ、相手のことを考えて楽しみながら、制作することがで

きた。また、作品を用いた「遊び」を異学年交流に取り入れたことで、会話のやり取りをする機会が多くなった。今後もさまざまな場面において学年交流の機会を設けていくことで、他者と関わることの楽しさを経験させていきたい。

④ にっこクリーンキャンペーン

ペア学年と協力して「にっこクリーンキャンペーン」を実施した。約50名の地域や保護者の方にも支えられ、たくさんのごみを集めることができた。高学年が低学年を支え、気遣いながら楽しく協力する様子が見られた。毎年恒例行事ではあるが、ペア学年が変わることで、毎年異なる学年と関わるができる。1年生は初めて参加したが、6年生が優しく教えることで、学校には安心できる優しい上級生がいること、困ったときには頼れる人があることが分かり、毎日楽しく登校できるようになった。クリーンキャンペーン後には、他学年で休み時間に遊んだり、声を掛け合ったりする姿が見られた。学年が上がるにつれて、下の学年の子に自然と優しく声を掛けられるようになってきており、お互いのよさに気づき、お互いを認め合える活動となっている。

(3) 授業内でのペア・グループ活動

今年度から授業内で話し合い活動を行う際に「にっこトーク」というキーワードを用いて、話し合いを始めるようにした。「にっこタイム」の4つのルールや培ってきた雰囲気と話し合い活動を意識的に結び付けさせた。キーワードを用いたことで94%の児童が「4つのルールを意識することができた」と答えた。児童アンケートでは『にっこトークで話してください』と担任の先生に言われたらうなずいて聞けたし、話している人を見ることができるようになった」と記述していた。

① 3年生の国語科での実践

目的意識をもって聞き合い、質問し合うグループ活動を実践した。当初、学級全体にグループ活動への苦手意識が見られたため、支援の手だてとして「にっこトーク」を導入した。事前学習で、単元のゴールに即した話し方や質問の「型」を押さえた上で「にっこタイム」を教科の話し合いに応用した活動を「にっこトーク」と定義付け、見通しをもたせた。座席をグループの形にし、「あいさつ」「うなずき」「話している人を見る」「指示を聞く」を意識して話すことを確認したところ、児童はこれまでの経験から活動イメージを捉え、スムーズに話し合いを開始した



【資料8 話し合いの様子】

【資料8】。活動中は各グループに笑顔があふれ、他者に受け入れられているという安心感が教室全体に広がった。事後の振り返りでは「話を真剣に聞いて質問してくれたことがうれしかった」「もっと自分のことを伝えたい」などの感想が挙げられ、自己有用感の向上と表現への意欲化が見られた。

② 5年生の道徳科での実践

自分の考えを誰かに伝えることが苦手な児童が多く、とりわけ、道徳で自分の考えを伝えることに抵抗のある児童が多いと感じていた。そのため、今年度から取り入れている「にっこトーク」の形で少数の友人に考えを伝える練習を行わせた。「にっこタイム」と同じ形、同じ話型で進めることで、児童は緊張することなく、自信をもって考えを発表することができた。その後の5～6人のグループやクラス全体で考えを発表する際には、導入する前よりも積極的に挙手し、考えを発表しようとする児童が増えた。また「にっこタイム」で培ってきた「相手の考えを否定しない」ということも道徳の授業の中でも生かされていた。相手の考えを否定せず受け入れ、自分の考えと比較して考えを深めたり、新たな価値観に出会ったりすることができた児童が多く見られた。

③ 5年生の算数科での実践

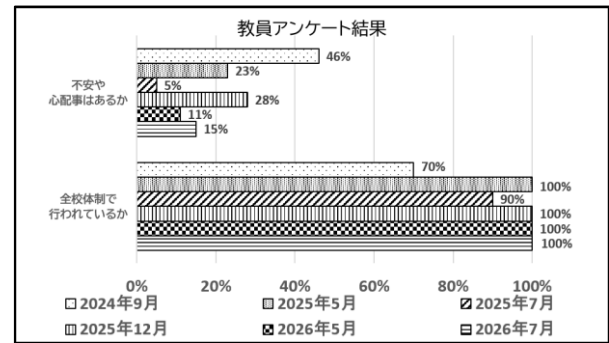
少人数での話し合い活動には意欲的である一方、全体の前で発表することには抵抗感があり、授業で発言をする児童が固定化していた。そこで、授業内で「にっこトーク」を意識的に設定した。児童は日頃の「にっこタイム」では、自分の考えを伝えることに慣れており、同様の流れや話型を用いたことで、スムーズに自分の考えを伝えられる姿が多く見られた。また、お互いの考えを否定せず受け入れ、うなずきながら聞き合うことができたおかげで、自分の考えに自信をもつことができた。その結果、全体の場でも発表できる児童が増えただけでなく、友達の意見を基に自分の考えを深める姿も見られるようになった。「にっこトーク」の取組により、学級全体に安心して発言できる雰囲気が広がっている。

8 成果と課題

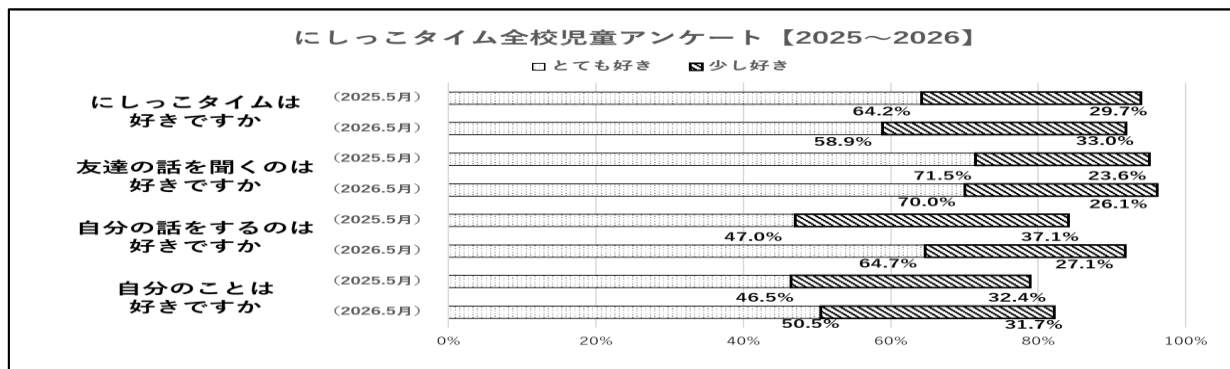
(1) 成果

昨年度からミニ研修を行ったことで教員の不安や心配事が46%から11%へと減少した【資料9】。不安が少なくなったことで、提案通りに実施する教員が増えていき、全校体制で取り組んでいることを教員自身が感じることできるようになった。

「にしっこタイム」を継続してきたことで、友達の話を聞くのは好きだけど、自分のことを話すことには抵抗を感じる児童の割合が少しずつ減ってきている。昨年度よりも「自分の話をするのが好き」「自分のことが好き」という質問に対して、肯定的に捉えている児童は増えている【資料10】。



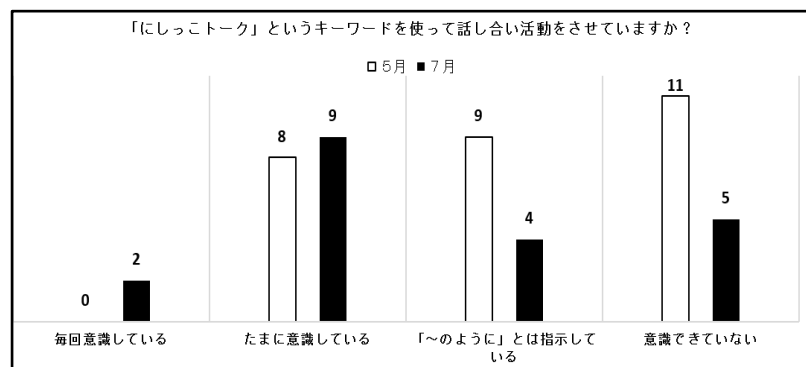
【資料9 教員アンケート】



【資料10 児童アンケート】

このことから「にしっこタイム」などの活動を通じて、児童たちが自分のことを表現する楽しさを知り、それが結果として自己肯定感の向上につながっていることがわかる。今年度の結果で「とても好き」が64.7%へと大幅に増加した【資料10】。児童たちが自己表現することに対して、自信をもてるようになってきている。また、型があることで支援を必要とする子にも取り組みやすくなった。

さらに、今年度新たに「にしっこトーク」というキーワードを用いて「にしっこタイム」で培ってきたスキルを発揮できるようにした。取り入れたばかりの5月の教員アンケートでは、意識できていない教員が多く、子どもたちも培ってきた関わりの力をうまく使いこなすことができていなかったが、7月には授業内での話し合いの姿も少しずつ変化が見られている。7月の教員アンケートでは、ルールを意識して話し合い活動に取り組んでいると感じている【資料11】。



【資料11 教員アンケート】

(2) 課題

これまでの研究の課題として上がっていたものが、自己肯定感や自己有用感が低く、自分のことを話すことに抵抗感をもっている児童が多いことであった。授業内でも「にしっこトーク」を取り入れて「うなずいて」聞いてもらえることで、自分の意見が認められたように感じ、発言しようとするようになっていく。また、「にしっこトーク」も「にしっこタイム」同様、即効性のある取組ではないため、今後も継続して取り組んでいくことで、子どもたちが安心した雰囲気の中で発言できていくようになると思う。